

## 中國性文化における性崇拜，生殖器崇拜（一）

The Worship of Reproductive Organs and The Worship of Sex in China's Sexual Culture

秦 莉 芳  
QIN LiFang

### はじめに

古今を通じて、人々は性に対してさまざまな見方を持っている。例えば、快樂な性、苦痛な性、危険な性、神秘的な性、下品な性等等。しかし、何百万年にわたる原始社会において、性は神聖なものと思われ、崇拜されていた。人々は性的意味を含める物事に対して焼香したり拝礼したり、ひれ伏して崇めていた。それは、人類文化の進歩であり、人類文化発展の歴史的限界でもある。

それを人類文化の進歩というのは、人類が周りの物事に対してより広い、より深い思考を持つようになったからである。動物には思考がなく、その行動を指導する心理活動などはない。それに対して、人類は原始人の時代から、既にすべての自然現象、人間と自然の相互関係、人間のいろいろな生理的反応と行為などについて、「why」と「how」、つまり「なぜこうなったのか」、「どうやって自身の生存と発展に有利になるのか」という二つの問題を持っていた。最も基本的な意味から言えば、それが人類文化の本質を成していた。一方、それを人類文化発展の歴史的限界というのは、人間には思考ができて、なぜという質問をしたとはいうものの、当時、社会の低い生産力、直感的、表面的、雑な人類思惟の下で、正確な答えが見つかるわけがなかったからである。そのため、すべてのことが神霊の存在で解釈され、「万物有霊観」が生まれてきたわけである。

例えば、光り輝く太陽は光と熱を人々に与え、夜は寒さをもたらす。晴れた天気は爽やかで、雨風や雷は怖いものである。植物は育ってまた枯れてしまう。滔々たる海は巨大な波を海岸にまで押し寄せる。偉大な天地はすべての生物を産み、更に、すべてを守っている。……これらのことは原始人には既に分かっていたが、その原因が説明できず、みな神霊の存在に帰させてしまっている。

更に、人間自身にも神霊が存在していると考えられていた。人々は生死などの現象を解釈できず、どうして女性の腹から新しい生命が出てくるのかも理解できないから、それを神霊の力と見なした。同じように、親族や仲間が死んでいても夢の中で出会うことができるなどのことも人々には理解できなく、人間の魂と体はそれぞれ独立して、死者の魂は人々を守ることも、傷つけることもできる、という

考えになった。

原始人の生活は困難に満ちていて、低い生産力の下で、飢え、寒さと獣の襲撃は常に彼らを苦しめた。人々は生きるために自然と粘り強く戦うしかなかった。彼らに快樂を感じさせることができるのは飢餓状態の中で得た食物の他に、満腹の後の性交である。だから、最も原始的な快樂は最も原始的、本能的な欲求（「飲食」と「男女」）から来ている。特に性交について、なぜ、そのことをする時、こんなにも酔いしれた、仙人になったような奇妙な感覚ができるのか、原始人には分からなかったのも、そこにも神霊が存在すると考えられるようになった。

つまり、原始人にとっては、世界中に不思議なものがいっぱいあって、神は万物を活躍、繁栄させている。即ち、「人死為鬼、樹久有靈、頑石能言、風雨有主」（人死んで鬼と為り、樹久しく靈が有り、頑石言うことができ、風雨には主が有り）というように、神は物質世界と人間の現世と来世を影響、制御することができる。また、神霊と人間の間が通じていて、人間は神霊を楽しませることもできれば、不快を与えることもできる。神様が楽しければ、人間に幸福を与え、神様が不快になったら、人間に災いをもたらす。そのため、人間は神を崇め、奉り、その機嫌を取らなければならない。このように、「万物有霊」の考えが、必然的に神に対する崇拜にまで発展していくのである。

性崇拜の考えは「性有霊」に源を持つ。性崇拜も多くの自然物に対する原始人の崇拜の一つで、かなり重要な一つでもある。なぜなら、原始人にとっては、飲食物をじゅうぶん見つけ出すことと性交することは最も基本的な欲求で、最大の快樂である。その性崇拜は、生殖器崇拜、性交崇拜、そして生殖崇拜の三つ面に分かれる。

### 一、生殖器は強大で魔除けができる

生殖器崇拜は性崇拜の主要内容の一つである。原始人にとっては、生殖器に関する見方にも変化があった。男女両性の外見上の最大な違いは生殖器にあり、次は発育後の女性の乳房にあるということ原始人は早くから知っていた。最初、彼らは性交、つまり、男女生殖器の接触を通して、極めて大きな快樂を得ることができるとしか分からなかった。その後、性交と生育の繋がりにも気づき、子孫の

繁殖には性交の道しかないと分かり、生殖器には神の力があると信じるようになった。その時、人々は生殖器官の実際の構造と機能が分からず、人間の体にある陰茎と陰門は完全に独立しているもので、人間の性行為を決めていると考えた。生殖器は、天地万物と同じく靈魂を有し、人類の抵抗できない魔力を持っていて、それに順応すれば性の快楽があり、子孫も繁殖でき、それに反抗すれば体が傷つき、罰を受けると考えられていた。このようにして、生殖器への崇拜が生まれてきた。

「性器者、万物孳生之源也。」（性器たる者、万物孳生の源なり。）中国古代の言語文字にはよく「陰」、「根」を使って、男女の生殖器を一般に指していた。例えば、男陰、女陰、男根、女根などである。「陰」は特に女性生殖器を指す場合があり、「根」には先祖、本源の意味があり、男性生殖器はよく「男根」と呼ばれ、明らかに崇拜の意味が含まれている。

生殖崇拜、性交崇拜、生殖器崇拜を説明する文化遺留物が数多くある。イギリスの傑出した民俗学者・人類学者であるエドワード・タイラーは遺留物の研究に実際的な意義があると考え、多くの原始的文化的現象をも遺留物の範疇に入れた。その遺留物自身がいかにも取るに足りないにしても、その研究は必ず歴史発展の発見に有益であると、彼は考えた。生殖器崇拜に関する文化的遺留物には、およそ下記の

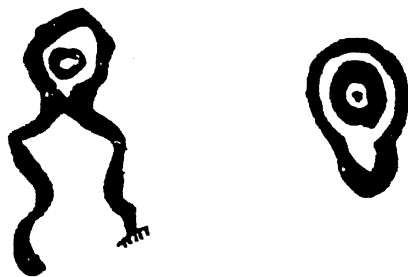


図1 賀蘭山岩壁画：女性生殖器崇拜の図形

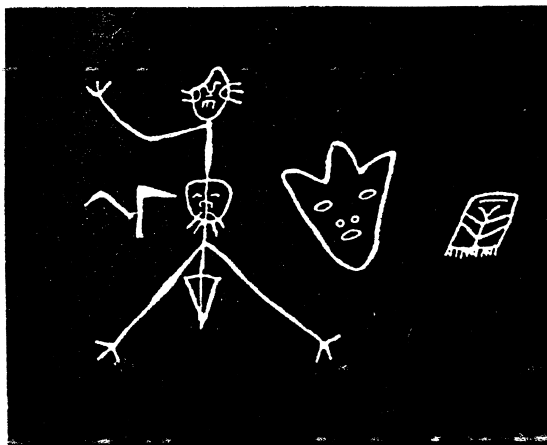


図2 賀蘭山岩壁画：女陰三角が描かれている人形図

ようないくつかの類型がある。

#### 岩壁画

岩壁画という原始人生活の生き生きとした記録の中には、生殖器崇拜の痕跡が多く見られる。例えば、陰山岩壁画、賀蘭山岩壁画と内モンゴル桌子山岩壁画の中にはみな男女生殖器の真に迫る程の図形が多く見られる（図1、2）。内モンゴル桌子山岩壁画には、蛙形の女性と男性生殖器が一緒になっている絵がある。それはつまり、生殖器、性交と生育を結び付けたもので、蛙は生殖崇拜のシンボルだからである（図3）。

踊り、狩猟、放牧、戦闘などを表わし、もっぱら生殖器を表現していない岩壁画も多くあるが、その登場人物には、みなはっきりした大きな男性生殖器が見られる。それは強さの有力なシンボルだからである。

生活と緊密に結び付いている岩壁画に、な女性生殖器を表わしたものがあまり見られないのは、なぜだろうか。それは多分、放牧、狩猟、戦闘などはみな男性の仕事であるからだろう。それらの岩壁画が表れた時、人類は既に女性より男性を重視する時代に入ったかもしれない。学術界において、男性生殖器崇拜と女性生殖器崇拜とどちらが先か、どちらが後かという論争があったが、女性生殖器崇拜が先だと考える人がいる。なぜなら、原始人は女陰から出てきた赤ちゃんを見て、不思議がっていたに違いない。女性生殖器崇拜はこの直観な分娩から来ているだけでなく、社会の発展にも原因がある。母系制社会には女性の地位が崇高だったからである。しかし、一方では、男女生殖器への崇拜は同時に現われた物で、両者を分割することは不可能だと考える人もいる。

しかし、なんと言っても、後に、人々は懐妊・分娩は男女生殖器による共同作用の結果だと分かった。同時に、母系制社会も父系制社会へと進み、社会発展における男性の地位が高まり、男性生殖器崇拜の発展も推し進められた。

古人は石や陶器などで男女の生殖器に似たものを作り、拝

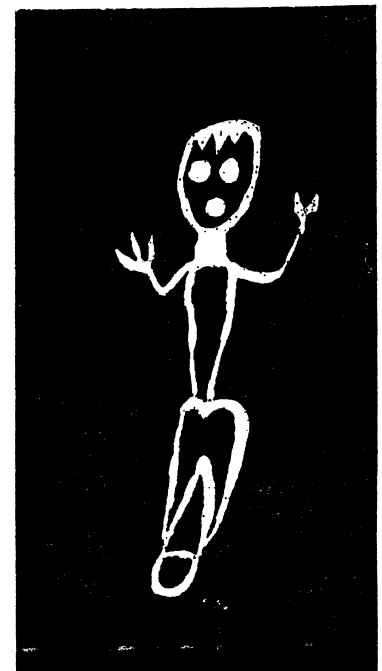


図3 内モンゴル桌子山岩壁画：蛙型の女性と陰茎

礼していた。

女性生殖器崇拜の場合、1974年青海の柳湾新石器時代遺跡から出土された人像彩陶壺の上絵には全裸の女性像があり、豊満な乳房の上に黒で乳首が描かれ、大袈裟に形作られた女陰も黒でその輪郭を描かれている。河南省の淮陽県で流行っている「泥泥狗」という泥人形も、強い色で輪郭が取られ、女陰が特に大袈裟に描かれている。これらは、みな女陰崇拜の意味が含まれている。

女陰崇拜に関して、「阿峽白」はとても有名である。雲南の剣川県には石鐘山があり、そこに有名な剣川石窟がある。それは南詔の時代から大理国の時代にかけて何百年間にわたって彫られたもので、今から既に1100年以上も前の歴史を持っている。石窟にはみな石の仏像であるが、不思議なことに、第八洞窟には高さ一メートルあまりの石彫りの女陰が仏像と一緒に並んでいる。その白族の人々はそれを「阿峽白」と言い、「白乃」とも言う。それは、赤ちゃんの生まれるところ、つまり、女性生殖器の意味である。石彫りの女陰を仏像と一緒に並べるのは、神様をけがす意味がまったくなく、当時の人々が女陰もかなり神聖であると思っていたからである。

福建の漳州から南100キロの所にある東山島の海辺には今でも巨大な石女陰が残っていて、陰核、陰毛、陰唇、膣などがありありと彫られている。今でもそれを奉って拝礼する島民がいる。また、時々それに登って、撫でる人が多く、その石がすべすべになって、特に長円形の陰門の部分が最もつるつるとなっている。その膣には石ころがあり、それは子供を求める人がわざと投げ込んだものである。地元の伝統風俗によると、それには一種の巫術と予測効果があり、石を穴に入れた者には子供ができるそうである。

2001年7月、重慶の綦江県中峰鎮で膨大な「男根聖地」が発見された。その清溪河は旱魃で雨が少なかったため、ほとんど「断流」状態になり、長年水面下に隠れていた6,000本余りの男性生殖器が現われてきた。その中には六角形の石柱もあるが、ほとんどは石壁の浮き彫りであった。

実際、そのようなものは水面の上にもあり、「桅子」と呼ばれ、それまであまり気にされなかったが、今度はみんな驚かされた。中で、最も高いのは3.5メートル、最も小さいのは十センチしかない。この彫刻は秦の時代から始まり、東漢の時、そこにある断崖絶壁上の棺桶と共に、現地部落の原始的な性崇拜方式だった。古代のひどく悪い環境と頻発する戦乱の中で、部族の人口はよく危険な臨界点にあった。そのため、このような人口の繁盛を求める風俗が起こった。その後、男女が幸せな婚姻、強い性能力、早く生まれる子供を求めるために、岩壁で一本の男根を彫るという習慣へと発展した。また、ある人の研究によると、一部の男根には女陰の象徴だと言われる羽状或いは元宝（通貨として使われた馬蹄銀）状の物が掛かっている、男根が女陰を貫くのは正に交配の図であり、陰陽均衡の思想を表わし、生命繁殖の過程における女性の地位に対する新たな思考との位置付けである。

男性生殖器崇拜の場合、古代には石や陶で作られた男根が多く崇拜物として使われ、「石祖」、「陶祖」と呼ばれた(図4, 5)。このような男根崇拜物は大体とても小さく、数寸ぐらいしかなく、男性の陰茎の原寸大だったが、非常に大きいものもある。例えば、紹興の大禹陵には今から4000年以上昔の「窆石」(実は石祖)が残っていて、人間の体と同じ高さである。これらの男根崇拜物はほとんど粗末でありながら、迫真力がある。例えば、1998年陝西省宝鸡から西の郊外にある福臨堡仰韶文化遺跡から石祖と陶祖が一つずつ出土した。石祖は長さ13センチ、男性陰茎の形で、青岩で加工された物だった。一方、陶祖は長さ5センチ余りで、先端には尿道口のような小さな穴があり、土をつまんで作られた物である。更にその根元は二つの睾丸と一緒に赤色の陶鉢の内側に粘着されている。このような男根崇拜物は河南、甘肅、湖北、湖南、山東、山西、雲南、広西、新疆、江蘇、浙江、陝西など、各地で発見されたことがある。

漢の時代の東方朔が書いた『神異経』には、次のような

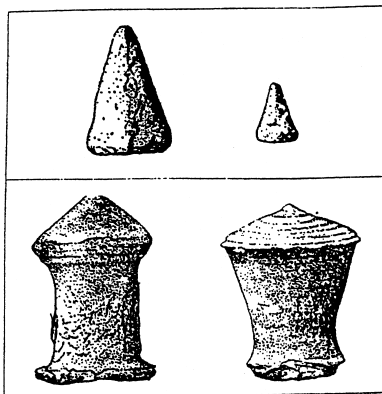


図4 5000年前の陶祖

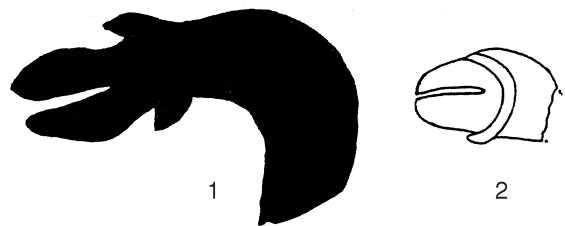


図5 1. 洪山廟一号墓の陶製かめの男根図案  
2. 甘肅秦安大址湾で出土された陶祖

記述がある。

「東南隅大荒之中，有朴父焉；夫婦並高千里，腹圍自輔，天初立時，使其夫妻導開百川，嬾不用意，謫之並立東南；男露其勢，女露其牝，不飲不食，不畏寒暑……」川の浚渫を命じられた夫婦が職務を怠ったため，処罰を受け，東南に立たされ，それぞれ性器を出し，食わず，飲まず，寒さも暑さも畏れない

ここの「男露其勢，女露其牝」という記述からかすかに古代生殖器崇拜の様子が伺える。

生殖器崇拜は直接的であり，その他に数多くの象徴物も存在して，男女生殖器のことを暗に指している。そこにも崇拜の意味がある。この面では世界中どこでも共通性があり，原始人の豊富な連想をじゅうぶん表わしている。

フロイトの考えによると，長い形を持って，膨れることができ，動力と貫通力を持った物なら，みな男性生殖器の象徴である。大きく分けて，下記のような何種類かになる。

自然物と人工物：石柱，樹幹，高層ビル，大煙突，塔，旗竿など

動植物：うなぎ，大根，なす，バナナ，蛇，うさぎ，象，犀牛，鳥など

服飾：帽子，ネクタイ，杖，傘，口紅など

武器と器械：刀，剣，槍，弓矢，鞭，カノン砲，ライフル銃，あいくち，宇宙ロケット，犁，槌，除草機など

日常生活用品：ろうそく，ペン，鍵，タバコ，シガー，シャンパン，アイスキャンディー，棍棒，水パイプ，ほうき，ギター，スポーツカーなど

フロイトの連想は実に広汎で，上に挙げられた物を全部

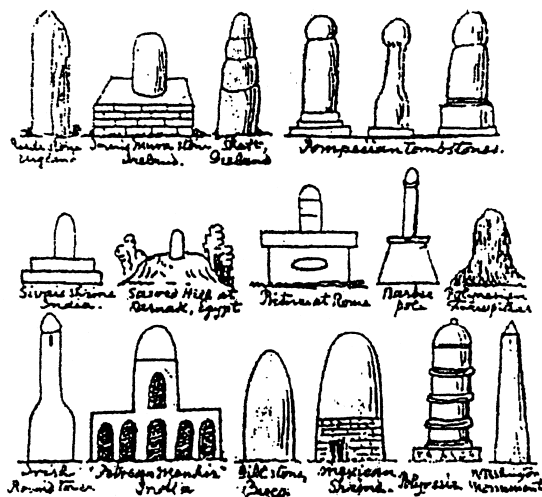


図6 外国にある男性生殖器象徴としての塔、石柱、墓碑と石の巨大柱

男性生殖器と結び付けることはおそらく現代人にもできないだろう。まして，原始人の場合は言うまでもない。しかし，原始の性文化にもたくさんの共通点を見出すことができる。

中国古代では，石柱或いは石柱に似た物を男性生殖器の象徴として崇拜する現象はとても普遍的だった。古代南方民族（例えば，巴濮荆越一帯）では，「牂柯」崇拜という現象が流行っていた。「牂柯」というのは男根と同じ形の柱形物のことである（図6）。『尚書・禹貢』によると，大禹が理水の時，各地で「随山刊木」（山に沿って木を切る），山川を祭ったそうである。『神異経』によると，崑崙山の上に高く聳え立つ銅柱があって，「天柱」と呼ばれ，拝礼されているそうである。『華陽国志』にも，次のような記述がある。蜀国古帝開明王朝の時代から宗廟が建てられ，国王が亡くなった場合，墓誌として高さ三丈の大石が立てられ，今では「石筍」と呼ばれる。——このいわゆる「刊木」，「銅柱」，「石筍」及び「華表」などは，「牂柯」と同じように，男性生殖器の崇拜物で，或いはそこから発展してきたものである。

塔も石柱と似ている。中国と世界の多くの民族や地域で，塔はみな男性生殖器崇拜の象徴と見られている（図7）。ワイラーは『性崇拜』という本で次のように述べている。

さまざまな形とサイズの塔または尖った屋根には，すべて何気なく原始的な男性生殖器石柱の直立した形が保たれている。セントルイスのセントビンセント教会の塔は，最初のころ逼真した男性生殖器の形だったが，1896年，ハリケーンによって屋根部分が倒壊してしまった。新しくできた屋根はもう最初の動機を表わすことができない。実は，世界中では，男性生殖器の形をした石柱または塔がない地域はない。

以上，ワイラーの最後の結論はとても肯定的で，正確な

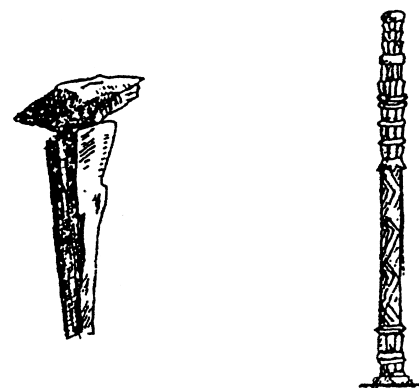


図7 左：紹興狗山の牂柯石柱  
右：湘西の祈祷師が祭祀の時に立てた牂柯神柱



ものである。中国古代の状況も正にそうである。

雲南の大理に、有名な「大理三塔」があって、大きい塔一つとその左右にある二つの小さい塔からなっていて、ユニークな形で有名な観光地となっている。この「大理三塔」の意味に関していろいろの説があり、主流では、その一大二小の三塔は一本の陰茎と二つの睾丸を象徴し、即ち「三位一体」ということである。

また、四川の岷江の辺に「樂山大睡仏」が横たわっている。岷江の対岸から眺めて、睡仏の頭部は右の方にあり、足は左で、安らかに眠っているようである。世に知られている高さ70メートル余りの樂山石仏は丁度大睡仏の心臓部分にあたる。更に、大睡仏の陰部あたりに「靈宝塔」が聳えていて、その部分は丁度生殖器の位置で、高く立っている。古代の人々がこの場所を塔の建設地に選んだわけは非常に明らかである。

中国古代では、宝塔は邪気を圧することができると広く信じられていた。「托塔天王」(塔を持つ中国伝説の人物)の持っている塔の威力、「宝塔鎮河妖」(宝塔が川の妖怪を鎮圧する)という言い方はみなその証拠である。しかし、なぜ塔には邪気を圧する力があるのだろうか。根源まで追及して研究すれば、塔は男根崇拜の象徴で、その威力も男性生殖器の威力から生まれてきたわけである。他に、なぜ古代の塔にはよく「舍利」(火葬した高僧の残骸)が保存されているのだろうか。それもまた、男性生殖器の象徴である塔には、「永世不滅」の意味があり、そこに葬られた者もとこしえに生きることができるからである。

その他の男根の象徴物も存在している。最も普通で、重要なのは鳥の模様である。最初は西安の半坡仰韶文化の彩陶残片に見られ、他に河南、浙江、甘肅、青海、陝西など、各地の考古遺跡でも大量に発見された。同時に、鳥形の器物も多く出土され、みな男性生殖器崇拜と密接な関係がある。ある考古専門家の考えによれば、鳥を使って男根を象徴するのは、鳥の頭は陰茎の形と似ていること、鳥が卵を産み、男根にも卵(睾丸)があること、更に、卵の白身は精液とも似ていること、などの理由があるという。

郭沫若は、「玄鳥生商」の神話を論じる時、次のように述べている。

「旧説では、玄鳥はツバメだと言われている」、「玄鳥はつまり鳳凰である」、しかし、ツバメであれ、鳳凰であれ、この伝説は生殖器の象徴だと、私は信じている。今でも鳥は(男性)生殖器の別名で、卵は睾丸の別名である(『郭沫若全集・歴史論』第一巻、人民出版社1982年版、第328～329ページ)。

この点に関して、今日でもいろいろな証拠が見られる。例えば、わが国の北方では口癖に「鳥」という字を使う人がいる。『水滸伝』の中の李逵はその典型例である。民間

では、陰茎のことを「鶏巴」、「鶏鷄」、「雀雀」という人がいて、やはり鳥の意味が入っている。

原始人は鳥と生殖を結び付け、子供を産むことについて、男の「卵」の精が女のお腹に入って孵化された結果だと解釈した。そのようにして男根の生殖機能を認識し、また、同時に「種の役割」ということも分かった。それで、男女生殖器の結合である性交と生殖とのつながりを見つけ出した。それは人類が自身を認識する上での飛躍的な発展である。

他に、男根の象徴物として、蛇、亀、とかげ、ひょうたんなどもある。蛇と亀は男根の形とよく似ているので、男性生殖器の先端部分は「亀頭」と呼ばれている。ひょうたん(ゆうがおを含む)は丸い形をして種も多いので、時々女性の子宮の象徴とされるが、円柱形で、先端が亀頭と酷似したひょうたんもあって、男根の象徴にも使われる。

女陰の象徴物に関して、最初のころ、原始人は女性の陰門と似ている穴のあるもの、例えば、陶製の輪、石の輪などを崇拜していた。考証によると、中国古代に流行した玉璧も女陰の象徴物だそうである。遼寧省喀左県では羊頭の付いた陶輪(図8)が出土された。輪は女陰の象徴で、羊には吉祥の意味があるから、つまり、女陰も縁起物という意味である。また、「女」と「子」を合わせて「好」になることも同じ意味である。

古代の祭礼に用いる器や道具にも生殖器の象徴物がある。例えば、玉琮は女陰の象徴で、女性の先祖を代表すると考えている学者が多い。琮は細長い形で、7、8センチから20、30センチまで長さもさまざまである。その横断面は四角で、真中に丸い穴がある。表面に『易経』の文書があるものもある。琮と女陰の関係について、その器の形、丸い穴、細長い管などがもたらした連想の他に、その使い道もひとつの理由である。琮は大地を祭る道具である(古人には「天円地方」の概念があり、琮も外方内円の形である)。古くから大地を母親に喩える中国人にと

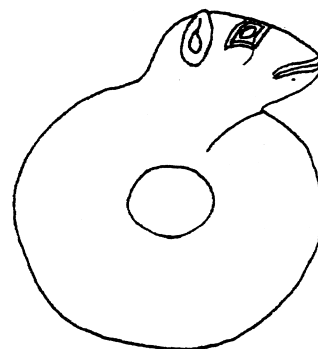


図8 紅山文化期の羊頭の付いた陶輪

っては、琮の形は亡くなった人の魂の帰する所である大地の母の子宮を思わせるのである。

大地を祭る他に、琮は古代の皇后の持つめでたい器物である。皇帝が圭を、皇后が琮をそれぞれ持ち、圭は男根の形と似て（図4参照）、琮は女陰に似ている。圭は中国古代の貴族が君主に参詣したり、祭祀や葬礼に参加したりする時に使う道具で、周の時代の古墳によく発見されている。『書・禹貢』に曰く、「禹錫玄圭，告厥成功」。圭にも大小の区別があり、所持者の地位のレベルを表わしている。後に、圭もいくつかの種類に分かれた。君主は「大圭」を持って、天地、先祖に会い、「珽」を持って、諸侯、大夫に会う。諸侯は「荼」を持って君主に会う。大夫は「笏」を持って君主に会う。このさまざまな種類は後で、「笏」と通称されるようになり、漢の時代以降、大臣が参内する時に専用の板となった。「如意」も「笏」と同じく、男根から発展してきたもので、祭礼の用品になっている。

玉璧、陶輪、石輪、玉琮などを女陰の象徴物とするのは、表面だけの浅い認識で、形の類比をしているだけである。また、その後、魚を女陰の象徴物にすることも流行った。魚の形、特に、双魚は女性の大陰唇のように、真中には穴も開いている。一方、魚の繁殖力が強く、子孫が多いので、原始人がそこに人口の繁盛の願いを託している。また、このような崇拜物の出現は原始社会の漁業生産の発展とも緊密なつながりがある。

魚、双魚を女陰の崇拜物とすることは、わが国の大量な出土文物によって証明されている。魚の模様がある文物が数多くある（図9）。年代が遠い例には、西安の半坡で出土された大量の陶器、遼寧省阜新県胡頭溝古墳から出土された二枚のトルコ石魚形下げ飾り、浙江省余杭県反山古墳から出土された白玉の魚などがある。年代の近い例にも、金の時代に流行った双魚銅鏡、宋の時代の双魚陶缶、清の時代の双魚磁瓶、双魚木彫り飾り物などがある。これらの例から、双魚を女陰の崇拜物とする風俗が原始時代から封建時代の末期まで、延々と続いていることが分かる。特に、

古代の人が双魚木彫り飾り物を玄関に飾ったり、軒に飾ったりしたが、今でも、このような習慣の見られる少数民族地域があり、厄除けの作用があると言われる。双魚の模様は、明、清の年画（旧正月にめでたい意を表わす絵）、結婚式に使われる銅の燭台にも見られるが、それは「吉慶有余（魚と同音）」（めでたく余裕がある）という意味である。

一つ注意して欲しいのは、女陰の象徴に魚を使うのは中国古代文化の特有ではなく、インドの聖所にも女陰を象徴する魚の図案が多く見られる（図10）。中東にある一部の民族の場合、死んだ雌の馬や駱駝の陰門を切り取り、ドアに釘付けをして厄除けをしたり、「幸運をもたらす」ことを祈ったりする。中国の玄関に飾る双魚木彫り飾り物とは如何によく似通っていることだろう。魚、特に、女陰を象徴する双魚の他に、貝殻の模様も同じ意味がある。貝殻は開いたり、しまったりして、その中にも小さな肉があるので、女陰を連想させる。こういった貝殻模様は馬家畜文化、仰韶文化で出土された陶器に見られる。同じように、国内外共に、オリブ型のもを女陰の象徴にする現象がある。それが世界中のキリスト教会の門や窓の形の由来である。それは「猥褻」ではなく、神聖なもので、「生命の門」なのである。

中国の古代では、花を女陰の象徴とすることも盛んだった。考証によると、仏像の足元にある蓮の花にもその意味がある。仏経の中で、「蓮花部」は女陰を指し、「金剛部」は男根を指している。しかし、仏教は代々受け継がれ、蓮の花のきれいさだけが人々に覚えられるようになって、その本来の意味が忘れられてしまった。花で女陰を喩えることは中国古代の文学作品にも多く見られる。例えば、膺を「花径」（花の道）、処女の性交を「開苞」（つぼみを開く）、処女膜が破れて流れた血を「落紅」「落英繽紛」（鮮やかな花が散る）、強くて深い性交の動作を「直搗花心」（膺の奥までまっすぐに衝く）という。「玉樹後庭花」はもともと戯曲の名前だったが、男女の性交という意味にも使われ

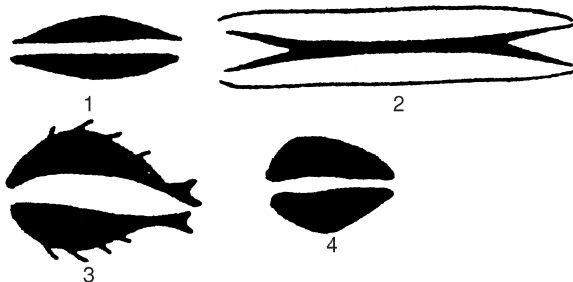


図9 インドの聖所で祭っている魚型崇拜物

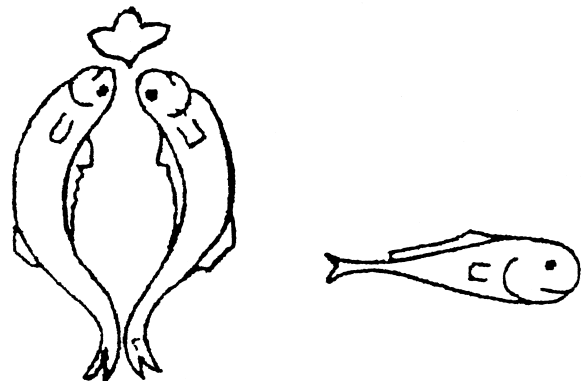


図10 女陰を模したいくつの抽象的な魚模様

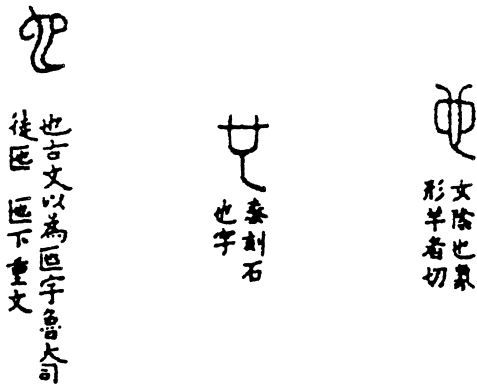


図11 「也」が女陰を象徴する

る。

男女生殖器に対する崇拜は文字の起源にも伺える。前述したように、「且」,「祖」は男根の形から来ている他に、古人は「也」(図11)という字で女陰を表わしていた。「也」は古代象形文字(古籀文)の中で、ありありと女性生殖器の大小陰唇と陰核を表わしている。それに対して疑問を持っている人もいるが、段玉裁が『説文』を注釈するとき、「本無可疑者、而浅人妄疑之。許在当時必有所受之、不容以少見多怪之心測之也」(もともと何も疑う必要がない、浅い人は勝手に疑問をもつ。当時なら、きっとそれを受け入れたかもしれない。怪しむ心をもって、そのことをはからってほならない)と述べた。

わが国では、少数民族の文字に今でもこのような痕跡が残っている。例えば、雲南省永寧県納西族の達巴教には古い経があり、その第一篇にある32の符号の中で、男女生殖器、膺、乳房、性交を表わす文字がある。

図に示したように、性崇拜と関係のある文字には、第一字：初一日、女性生殖器、大吉日；第三字：初三日、女性膺、大吉日；第四字：初四日、女性乳房、大吉日；第五字：初五日、男女性交、特大吉日；第十七字：十七日、豚生殖器、吉日；第二十六字：二十六日、男性生殖器、吉日などがある。

このような文字学上の証拠は他にもたくさんある。例えば、甲骨文では男根のことを「上」と書き、金文では「T」と書く。甲骨文の雄羊、雄牛、雄豚の文字にはみな「上」という部分があり、雄の生殖器を表わしている。ここからも古代文化に対する生殖器崇拜の影響の大きさが分かる。

現存する遺留文物と文字の考古学遺物等から生殖器崇拜を発見することができるだけでなく、何千年乃至何万年間も受け継がれてきた風俗習慣の中からもそれを証明することができる。

例えば、皖南(安徽省南部)の宣城地域のたんばには、よく不思議なほど大きい生殖器を持つ坊さんの石像が立てられ、そこを通る人々はそれを触って、拝礼し、平安無事

を祈る。清の始めの人、鈕琇が書いた『觚剩』の内容によると、北京では、女性が上元(旧暦1月15日)の夜に出かけて、町を歩き、必ず正陽門まで行って、その城門の釘を撫でてから帰るという「走百病」の風習があるそうである。釘も男性生殖器の象徴物である。当時の宰相である陳之遴の妻、徐燦の書いた詞にも「丹楼雲淡, 金門霜冷, 織手摩」(「沙」の下に「手」)「怯」(寒い冬の夜、女性のほっそりとした手が恥ずかしそうに門をなでこすっている様子)の内容があり、これは釘を撫でることをさしているのである。

本学の古代性文化資料室に展示されている文物には中国古代の生殖器崇拜の状況を反映する物は少なくない。例えば、6000年前の石祖、陶祖などである。中には、宋の時代の石祖があり、その根元に穴があって、紐で玄関の梁に吊るして邪気を退治することができる。また、清の時代のきぬたもある。それを厄除けのために子供の体につけるのだった。きぬたも男根の象徴で、そのきぬたをつけた子供は閻魔王の派遣してきた鬼につかまらなく、夭折することはないと、古代の人は信じていた。博物館には、陰茎を誇張された墓の鎮守をする陶製の人形や木製の門神(門を守る神)なども展示されている。古人はこうして大きい陰茎を通して、その人形や神の持っている魔除けの威力を表現している。

同資料室には、明代の巫女の錫像もある。その巫女は手で、女陰のような物を持ち、それも魔除けのためである。清の人俞蛟の書いた『臨清記略』には次のような記述がある。清乾隆三十九年(西暦1774年)、山東では王倫をはじめとする暴動が起きた時、官軍が城を守り、王倫の軍隊が攻撃した。城の上にある兵士は敵軍の中に黄色綵の服を着た人を見た。その人は城壁から何百歩の所に座り、なにやらつぶやいている。官軍は集中砲火を使ってその人を打ったが、弾丸は全部彼の周りで地面に落ちてしまった。その人は魔法を使っているようで、官軍はなす術もなかった。そこへ、ある年を取った兵士が急いで一人の遊女を連れてきた。その女性が下半身を裸にして、城壁の上に座り、陰門をその人に向かってみせたら、砲弾は直ぐその人を倒してしまった。

以上のような記載は個別現象ではない。古書にもいわゆる「陰門陣」という記載がある。つまり大勢の女性を集め、陰部を露にさせ、敵を破ったことがある。それは実に荒唐無稽で、余りにも愚昧な物だが、そのような記載が残っていて、信じる人もいる。なんとと言っても、その中から見られる長年伝わってきた生殖器崇拜の強い影響は明らかである。

20世紀90年代の初め頃、湘西(湖南省西部)でボートに乗って川下りをする観光客は「聚仙池」という人家のな

いところで、裸になって川で体を洗っている少数民族の男性をたくさん見た。その男性たちは長い時間、丁寧に、精神を集中して、生殖器をこすり、洗っていた。また、通りかかる貨物船や漁船、または観光船を見たら、その人たちはすぐ岩の上で真直ぐに立ち、生殖器を知らない人たちに見せるのである。もし相手がそれを気にしなければ、彼らは怒って石を投げることもあるそうだった。その男たちは「哈乱族」と自称しているが、国家の公表している56の民族に含まれていない。その民族の女性も集まって入浴し、長い時間をかけて生殖器をこすり洗う習慣があるが、ただ山の下に下りてこず、人に見せないそうである。その男性たちは知らない人に生殖器を露出することを「ごろつき行為」と思う人もいるが、実はそれも生殖器崇拜の1つで、生殖器のことを光栄に思っていることの現われである。

## 二、吉祥且つ神聖である性交

原始人は性交に対し崇拜していた。それはまず、性交から得られる不思議で言いようもない快樂があるからである。後に表わされた『詩経・召南・草虫』が描いているように、「亦既覯止，我心則降……，我心則説……，我心則夷」（性交の後、わが心が落ち着き、楽しく、喜びを感じる）。性交にはきっと神力または魔力が存在すると考えられていた。その後、人々は性交と生育を結びつけ、性交があつて初めて、女性が懐妊し、分娩して新しい生命が生まれると認識し、一層性交を崇拜するようになった。

今日では、多くの人々は性に対して、心の中で非常に興味を持っているにもかかわらず、表向きでは「避ける、隠す」という態度を取って、性を汚穢不潔のものと見ている。この考え方は、遙か昔上古時代の人々の性に関する考え方と正反対である。原始社会とその後のかなり長い時期に、古人は性をとても神聖且つ自然なことと見ていた。もっとも、性交に対して崇拜することは幼稚で可笑しいが、性を極自然なことと見る態度は取るべきである。人類の性行為には快樂の機能、健康発展の機能と生育の機能がある。性への禁固が実行された長い歴史の中で、性は下品なものと考えられ、性の快樂を求めることも淫らで恥ずかしいこととなった。房事養生を唱えた中国古代の房中術も淫猥と見られ、次第に否定されてしまった。そのため、性交は子孫を生育するための仕方がないことになった。例えば、中国の古代では、古い觀念に取られた道学の先生が妻と性交する前に、「為後也，非為色也」と自己弁明する。つまり、君と性交するのは、淫蕩で性欲のためではなく、後継ぎのためで、仕方がなくやっているのだという意味である。西洋にも似通った現象がある。中世のヨーロッパでは、夫婦が性交する時、妻は厚くて長い服を着て、全身を覆い被さり、男性の陰茎が挿入できるように、股間のところだけ小

さな穴をあける。そのように、懐妊、生育のためだけで、性の興奮と快樂を引き起こす如何なる接触をも避けたのである。今の人にとっては、そのやり方は実に不可思議なものであろう。

以上の事例と原始人の性交崇拜は性に対する人類認識の両極端であり、共に愚昧な現象であるが、比べてみれば（もし比べることができるなら）、原始人の性交崇拜はもっと質朴であり、もっと人間性に合うようである。『戦国策・秦策』には次のような物語がある。韓の国が楚の国に襲われ、使臣を派遣して秦の国に救いを求めた。如何に韓の国を救援するかを討論するために、秦の国では軍事會議が開かれ、秦宣太后も参加した。太后は兵力を分散させず、国の主要兵力を集めて、楚の軍隊の一点を攻撃すると主張し、一つの諭えをした。「元国王が生前、私と性交するとき、足を私の体の一点に押し付けたら、私は痛みを感じた。しかし、国王が全身を私の体の上に押ししても、私はあまり重みを感じなかった。それはなぜだろうか。」実は、秦宣太后は単位面積あたりの圧力という物理学の原理を利用して、双方の軍事情勢を分析し、行動の原則を示したのである。その会話は朝廷で行われ、更に、皇太后が外国の使節に向かって話したものである。後世にはそれを理解しない者もいて、例えば、清の学者王士禎は「此等淫褻語，出於婦人之口，入於使者之耳，載於国史之筆，皆大奇」<sup>1</sup>（このような淫らで猥褻な言葉が婦人の口から出て、使者の耳に入り、更に国の史書に載っていることは、みな甚だしく可笑しいことである）と評論をつけた。本当は何が可笑しいのだろうか。古人は性交を自分の神聖で莊嚴なことと見て、なぜ例に挙げるができないのだろうか。その「国史之筆」がこのすばらしい出来事を記録してくれたおかげで、後世の人々は古人の性の觀念を知ることができたから、感謝すべきである。後世の学者がそれに対して驚きいぶかったりするのには、その学者が歴史的觀念に欠け、自分の尺度、近世の尺度を以って古人のことを評価したからである。

エンゲルスはこのような性を卑しめたり隠したりする態度に対してずっと反対していた。彼は次のように直言している。

私が指摘しなければならないのは、ドイツの社会主義者も、ドイツの俗者根性である偏見と小市民の偽りの羞恥心を公然と捨てなければならないことである。実際、その羞恥心は秘密の猥褻會話を隠すために存在するだけである。もし、フライリヒラートの詩を読めば、人間にはまったく生殖器官がないようにすぐ思えるが、詩作の中で道德家気どりで、まじめくさった顔つきをしているこのフライリヒラートほど猥褻な物語の盗み聞きが好きな人はいない。ある日、遂に、少なくともドイツの労働者たちは平然と昼や



夜に自分のやっていることを話し合い, その自然且つ必要で, 非常に気持ちのよいことを話し合うことに慣れるだろう。正にロマンス語民族のように, ホメロスとプラトン, ホラティウスとユウェナリスのように, 旧約全書と『新ライオン新聞』のように。

もし我々は性を「淫穢不潔」だという考え方で, エングエルの言った「小市民の偽りの羞恥心」を捨てれば, 古代における性の現象に対する理解も大いに深まる。古書には性交に関するさまざまな不思議な言動が記載されている。例えば

漢の陳伯敬は妻と性交する前に, 必ず暦を調べ, 吉日を選び, 女中に何回も知らせに行かせてから, 妻の部屋へ行く。

唐の薛昌緒は妻と付き合う時, 必ず再三女中にそのことを伝えさせた上で, ろうそくを持って部屋へ行く。そこで話をしたりお茶を飲んだりお菓子を食べたりしてから別れる。もし妻と性交したかったら, 妻の部屋に泊まる。それでも必ずあらかじめ「薛某以継嗣事重, 輒欲卜其嘉会, 不知娘子可否慨允?」(私は後継ぎのことを重んじ, 一緒にになりたいが, 奥さんは喜んで許してくれるのか)と書いて, 女中に妻の許可を仰がせる。

明の陳献章は妻と性交する時, 必ず最初に「献章求嗣, 請示裁奪」(自分は後継ぎを求めようとするが, ご判断を示してもらいたい)と言って母親の指示を仰ぎ, 許可をもらったら, 部屋へ行って「事をやる」。彼の友達の顧余慶がそのことを知り, 納得できなく, 「なんと可笑しいことだろう。お母さんは後家を通す未亡人で, 何でそんなことを聞くの?」と陳を叱責した。陳献章はそう言われて, 黙って退いた。<sup>2</sup>

清の李剛主はまじめに学問を研究し, 毎日のやることを忠実に日記につけて, 少しも隠さない。もしその日に妻と性交していれば, 必ず「某月某日与老妻敦倫一次」(何月何日老妻と一回性交した)楷書できちんと書く。

『笑林広記』には次の笑い話がある。ある儒学の書生が新婚の夜, 花嫁と性交する前に, なんと花嫁に向かってべこべこしてお辞儀をし, 周公の礼儀を行おうとした。人々に「迂闊」と笑われた。

実は, これらのことは何も可笑しくない。それは性交崇拜の影響を受けて, 性交を神聖且つ荘厳で, 後継ぎを求める大事だと思っただけである。しかし, 性交を「汚穢不潔」だと思える人には受け入れられないことである。古人は性交を「敦倫」と言い, つまり人倫に厚く合う意味で, 「周公の礼を行う」と言い, つまり, 夫婦の性交は先祖の定めた古いしきたりである。「汚穢不潔」などは全然含まれていない。性交崇拜は性交に対する人類認識の始めで, 後に盛んになった性保守主義と性禁欲主義

によって否定されたが, 現代社会は「否定の否定」の精神を以て, 性交に含まれる迷信的成分を排除し, その中にある性交に対する尊重と自然の意味を肯定すべきである。

原始人と古人の性交崇拜は岩壁画, 文物, 古書, 宗教と風俗習慣などの面に現われている。

原始時代の岩壁画には, 性交の図形が少なくない。それは原始人生活の重要な一面をありありと反映し, 他の生活風景と一緒にしている場合もある。性交に対する重視と崇拜がその中から映し出されている。

例えば, 賀蘭山岩壁画の図 12 のように, 左に二人が性



図 12 賀蘭山岩壁画：野合の図

交している。右側の一人が手を額に当てて祝意を表わしているようである (図 13)。この場合, 二人が性交している。



図 13 賀蘭山岩壁画：野合の図

その上と下にアーチ形の模様があり, 神様がそれを守る意味があるらしい。更にその下にいくつの点があり, 射精を象徴するようである。

陰山岩壁画の中には, (図 14) から分かるように, 性交と放牧活動が入り混じって, 原始人は生産活動の中で, 野外で性交することもある。(図 15) は当時野外の集団性交を反映している。

すばらしい新疆の呼図壁岩壁画にも性交の図形がたくさ

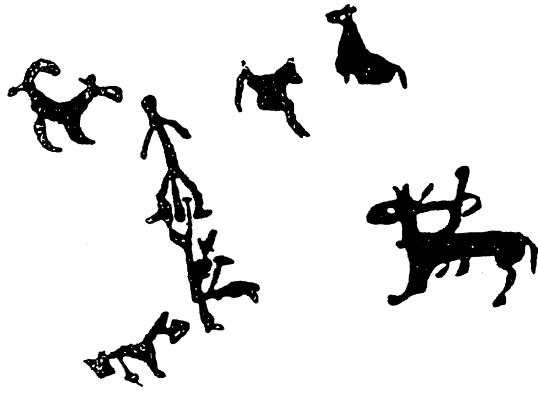


図14 陰山岩壁画



図15 野外で性交する



図16 新疆呼図壁岩壁画

んある。(図16)のように、下には虎が二頭あり、その陰茎と睾丸がはっきりしている。いっぱい開かれた弓は狩猟の意味である。その上に性交をやっている人が二組ある。

左側の一組では、猿の顔をした人の勃起した陰茎は女性の開かれた股間をまっすぐに指している。(図17)も同じで、

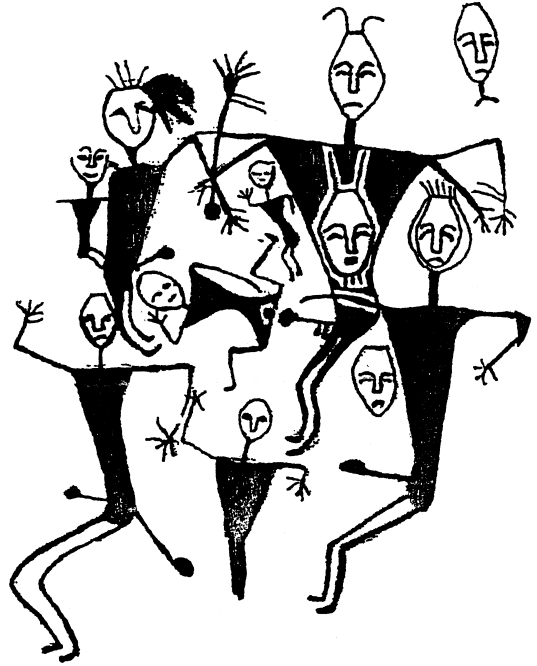


図17 新疆呼図壁岩壁画

図の真中に仰向けの女性がいて、両股を大きく開き、陰部を露にしている。体の大きい男性が勃起した陰茎をその女性の陰部に指している。注意して欲しいのは、男性のお腹にはもう一つの顔が書かれていることで、それは、性交を通して、新しい生命が生まれ、男性の方から女性に伝えられたものである。

(図18)の示しているように、左江岩壁画にも似たよう

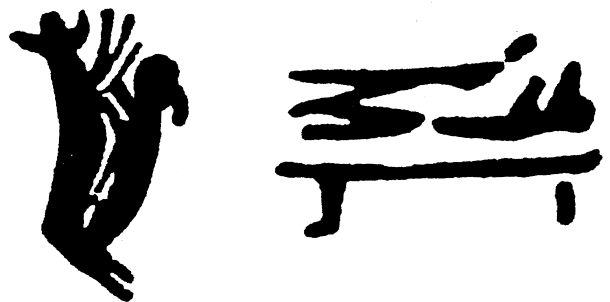


図18 左江岩壁画

な性交図形がある。内モンゴル烏蘭察布にある岩壁画も性交の象徴的意義をもっている。

以上のように、性交の図形がある原始的岩壁画は勿論「秘戯図」や「春宮図」ではない。「秘戯図」や「春宮図」は後世に現われた名称で、原始的岩壁画よりもずっと精緻である。しかし、後世の「秘戯図」や「春宮図」の一部に

も性交崇拜の意味が含まれている。

今日の人が性交図を「淫らな物」と思う考え方に反して、古人はその図形に魔除け作用と神聖な意義があると信じていた。例えば、楽浪で出土された漢代のべっこう漆塗りの箱の図案、武梁の石彫りに見られる伏羲女媧交尾図、青州城北豊山の下の貝塚にあるハマグリ貝殻の春画など、古代では「厭勝」と呼ばれ、性交には巨大な威力があるから、幽霊や妖怪などは皆それを避ける。このような考え方は現代人のと正反対である。現代人は性交の図形を「邪」と思い、古人はそれを「正」と思う。男女の性交を通して、子孫を繁殖することができ、生命代々受け継がれ、生は死を制し、正は邪を圧することができる。近代のJ之誠は『骨董瑣記』の中で「漢時発冢鑿磚，画壁皆作男女交状。」（漢の時代に彫刻の煉瓦で墓を作り、壁画は皆男女性交の様子を描いている）と言っている。また、『絵苑』には次のような話がある。「閩洛周齊之間，有人耘田，常掘出古瓷器，貝介之属，千形万変，並彩画男女秘戯。耆老相伝，是五胡乱華之時，元魏，北齊惧其地有王氣，埋之以為厭勝之具」（閩洛周齊（各地名）一帯で、田んぼを耕す時に、よく古い磁器、貝殻などを掘り出すことがある。その形はさまざまで、男女性交の絵が書かれている。お年寄りの話によると、外来民族が中原に侵入したとき、元魏、北齊（王朝名）が土地にある古代王様の霊気を恐れて、それらのものを埋めて、邪気を圧するようにした）。嘉峪関の魏、晋の古墳からも、馬の交配模様を書いた煉瓦が発見された。その中には人畜繁盛の他に、魔物を鎮し、邪気を圧する意味も入っているかも知れない。

邪気を圧することと災害を払うことは常に一緒になっている。本学古代性文化資料室には「避火図」が保存されている。その中に含まれている性交崇拜の意味も明らかである。普通の「避火図」は一卷の春宮図で、8コマから12コマまで、いろいろな性交の様子が書かれている。中には戯曲の名前、例えば「少華山」、「独占花魁」などが付けられたものもある。これらの絵は筆で書かれたり、木版で刷られたりして、古風で質朴な風格があり、民間の味がある。人々はそれを巻き上げて、部屋の梁にかけ、それで「避火」（火事を避ける）ができると信じている。清の終わりと民国の始めごろに流行った民間俗曲である『剪靛花』には『母女頂嘴』（母と娘が言い争う）と言う一曲があり、それには「綢緞被窩床上擺，床後暗藏避火図」（寝床には緞子の蒲団が敷かれ、その後ろには「避火図」が密かに隠されている）との内容がある。ここでいう「避火図」は「春宮図」の代名詞で、火事を避けるためではなく、ベッドの上にいる男女の余興のために置かれたものである。

清の末期『双棧景閣叢書』を編纂、整理して、中国古代性文化の保存に貢献した葉徳輝には「火神害羞説」がある。

彼は蔵書の中にだいたい春宮図（揚子江上の客船で売られている俗悪な春画）を一枚か二枚ぐらい挟み込む。友達の陳子展にその訳を聞かれ、葉は「火を避けるためである」と答え、更に、説明を加えた。「火の神はもともとお嬢さんであり、その世話をする小間使いは三十六名もいた。しかし、後で、彼女は玉皇大帝にかまどの下女まで下げられ、荒っぽい性格になった。彼女は普段薄い黄色の服を着て、怒ったら、赤の服に着替え、火事を引き起こす。しかし、閨房の出身なので、いくら怒っていても、そんなもの（春画）を見たら、恥ずかしくて、逃げてしまうのである。」<sup>3</sup> それもただの一説に過ぎないだろう。

本学古代性文化資料室にはまた「護書」というものも展示されている。その中にも春宮図があり、「避火図」と同じ役割を果たし、災害と邪気を追い払うために、家に置かれていたそうである。

古代から今日まで残されてきた石や煉瓦の彫刻、青銅器、陶器の上に、性交に対する原始人の崇拜と後世に与えた影響が見られる。

原始時代には、人々は鳥を以って男性生殖器を象徴し、魚を以って女性生殖器を象徴した。更に、「魚を銜える鳥」の模様で性交を象徴した。その模様は陶器、煉瓦彫刻と岩壁画によく見られる。山西の長治では漢代の「魚を銜える鳥」形の青銅ランプが出土した。その中にははっきりした性交崇拜の意味がある。本学古代性文化資料室には5000年前の紅山文化時代の「魚を銜える鳥」の銅製複製品が展示されていて、このような性交崇拜の象徴物は少なくとも5000年前に既に存在していたことが分かる。

わが国の古代には、「玄武」という図案があり、軒瓦の先端と古代建築の他の部分によく見られる。その図案はざっと亀と蛇の合体だと思われていたが、考証によると、それは実際蛙と蛇の合体で、性交と生殖を象徴していると言う。

文物の中には、剥き出しになっているものもある。例えば、四川の彭山で石彫りの『対吻図』が出土し、素朴自然で、男女の性愛をありありと表わしている。また、密宗仏教には「大聖歡喜天」などの男女が抱き合い、性交している像もある。つまり、性交には神力が存在するだけでなく、「双修」などを通して、遂に悟りの果を得ることができることを表わしている。このような例はみな性交崇拜の痕跡である。

性交崇拜の風俗は源が遠ければ流れも長い。原始人の舞踊にも性交を模倣する動作がたくさんあり、魔除けの意味も含まれている。このような風俗は今でも一部の少数民族の中で残っている。

古人は性交には魔除けの作用があると固く信じていた。小説『封神榜』には次のような内容がある。双方が戦い、

一方の魔法によって、天地共に暗くなってしまった。それに対して、相手の部隊は「万点梅花帳」を挙げて魔法を破った。そのいわゆる「万点梅花帳」は、大勢の処女と性交する時に、処女膜が破れて流れ出た血で染まったもので、比類のない威力がある。それは勿論神話に過ぎないが、今日でも、性交時に使われた「褻巾」或いは女性の生理に使われたナプキンを玄関にかけて魔除けをする例が見られる。

古代的、原始的性風俗は少数民族地域に多く残されているが、中原地域の一部の所でも残存していて、20世紀の前半までずっと守られ、50年代以降だんだん変わった。映画『紅高粱』には、一つの名場面がある。「おばあちゃん」はハンセン病患者と結婚させられたが、性交を堅く拒否した。三日後実家へ帰る途中、コウリヤン畑の中で「おじいちゃん」に拉致された。彼女は少し抵抗した後、身を任せた。そのうちに「おじいちゃん」はコウリヤンを倒し、空き地を作った。「おばあちゃん」は目を閉じ、仰向けになって、性交を待っていて、「おじいちゃん」はすぐに飛

び掛からず、彼女の前で土に手をついてお辞儀をし、挿んでから性交を始めた。……この場面の描写は当時（20世紀30年代初め）わが国西北のある地域の民間風俗を如実に反映している。性交の神聖さと性交に対する崇拜を表わしている。

我々は歴史的な見方で以上のさまざまな性交崇拜の風俗を見なければならない。「始めの頃、性崇拜の意図は純潔で、私たちの宗教の持っている不純或いは淫猥な考えをまったく有しない。原始人の実行しているこれらの拝礼と儀式は、現在の私たちから見れば、正にげすそのものであるが、それが実行された当時では不潔或いは不敬な考えは毛頭なかった。」<sup>4</sup>もし我々がこのように見ないで、現代の目で古人を厳しく要求するなら、我々自身の愚かさであろう。

実際、現代人は性のことを淫らで下品なものとしているが、その観念は原始人の性崇拜より一体どのくらい進んでいるのだろうか。

---

#### 参考文献：

- 1 王士禎：『池北偶談』。
- 2 以上の三つは皆『古今譚概』巻一による。
- 3 劉達臨『性と中国文化』、人民出版社1999年1月第一版、106～107ページ
- 4 ワイラー：『性崇拜』、中国文聯出版公司1988年11月第一版、204ページ